

「公共建築の日」フォーラム

まちの再生と公共建築

～歴史的資産と個性あるまちづくり～

北海道開発局 営繕部

平成18年11月10日、北海道庁赤レンガ庁舎において、公共建築に対する人々のより一層の意識の向上を図り、また国民生活により密着した公共建築を目指して創設された「公共建築の日」を記念して、パネルディスカッションを開催いたしました。

思い入れの価値

角 すばらしい歴史的な建物で今日のようなフォーラムを開催することができることは、大変光栄に思っております。



コーディネーター
角 幸博（北海道大学大学院工学研究科教授）

最初に、私たちの身の回りから失われた歴史的な資産から紹介します。藤学園のキノルド記念館です。1924年の建築で、北海道を代表する建物でしたが、'99年の2月に解体が決定され、今、レプリカが建っております。

歴史的に貴重な財産が、「公共」のものという考え方があり、本当にこれでよかったのかと思います。普段、私たちが目にしている現象が実は公共ではないか、ということで挙げさせていただきました。

一方では、北星学園の創立百年記念館のように残されているものもあります。壊す話もありましたが、建物の敷地内で保存し、記念館として再生していこうと立派な姿に修復されました。'98年には登録文化財として登録され、現在に至っています。

次に、国の重要文化財になった遺愛学院の女子高等学校の本館です。中は非常にきれいな形で使っています。生徒たちも大変気に入っており、親子三代で学校に通っている方々もおられ、やはり歴史や記憶は、こういったものとかかわり合

ながらできるのもあると思います。

次に「産業遺産」ですが、産業遺産保存の例としては、美唄の炭鉱メモリアル公園があります。住友にも「東洋一の立坑」と評された大規模なものがありますが、空知管内にはたくさん残されています。この産業遺産をどう評価したらいいのか、例えば産業史的な価値。さらには生活文化価値。生活やコミュニティーを語る、それから産業の繁栄や文化を語るものもあるわけです。産業システムとしては、巻揚槽まきあげやぐらのほかに、原炭ポケットのような鉄筋コンクリートの非常に迫力のある建物が残されています。炭鉱の文化や繁栄を語るものとして、夕張の北炭鹿ノ谷倶楽部があります。

この他、絵や写真で描きたいという美的な価値があるのではないかと思います。また、景観のランドマークや特色ある景観を構成する景観的な価値もあります。

最近、さらにプラスアルファが必要と思うようになりました。地域住民にとってどういう意味を持ち、どう愛されるかは実は非常に重要で、「思い入れ価値」、つまり、地域の方々がそれにどのような思い入れを持つかが、今後のまちづくりに活用する価値や評価の軸として考えることができるかと思います。

これらを今後どうしていくか、問題提起も含めてお話しさせていただきました。

新旧建物の区別がつかない連続性

平尾 最初に、増毛町のご紹介をさせていただきます。現在は明治、大正、昭和の建物が連続して、まち並みを形成しています。このまち並みを見ますと、時間とは流るだけでなく、積み重なるものでもあり感じます。特に増毛では、そういう感覚を持ちながらまちと接することが大事だろうと思います。



パネリスト 平尾稔幸
(平尾建築事務所代表)

駅前にも木造3階建ての富田屋旅館と観光案内所があります。角先生のお話の中で、美的価値の要素のお話がありましたが、増毛のまちも今まで、映画の「魚影の群れ」や高倉健の「駅STATION」などに何回も使われています。

その中で、町が重要文化財として改修した建物があります。旧本間家（商家）が構えていた土地と建築物が町に寄附され、老朽化した部分を撤去し、新しく創っている部分を自然に見せながら、今は展示施設として使われています。

國稀酒造さんは、もともとあった店舗の部分、倉庫、後ろの石造の仕込み蔵を残しつつ、新しく土地を手に入れながら増改築を繰り返してきた建物です。増改築では既存のものを生かしながら新しい要素を加えることで新たな価値が生まれる場合もあり、既存のものをそのままに連続性を最重要視して、手を加えたように見せないやり方があると思います。ここでは設計した痕跡を残さない、初めて来た人にとって新しい建物も古い建物も区別がつかない状況をつくることも國稀さんの希望であり、大きなコンセプトとして大切にしました。

もともとの店舗の部分と明治からの石蔵倉庫は、ボリューム的には一つの建物ですが、米蔵、事務所、原料処理のあたりの建築を分割することにより、今までのスケール感を連続させ、表から見える部分にできるだけ古い素材を使っています。事務所棟などの軟石は、もともとの倉庫を解体した部分や札幌軟石での倉庫を札幌で買い取って運んでいます。内部も手を加えましたが、もとの雰囲気をつぶさず変えない。新しく造った壁にも古い素材を使って行って、痕跡を残さないようにしています。

こういった形で、一つの企業ですが、まち並み

と地域の人たちに積極的にかかわりながら生きている姿があります。

ワークショップが生んだ条例と地区計画

濱田 江差町のまちづくりをご紹介します。私が最初にかかわったのは1980年の「追分会館」で、「江差らしい、追分にふさわしいものにしたい」ということで、多くの議論がなされました。海岸段丘で見下ろされるため、「周辺の屋根の連なりの中で、ここだけが箱だとおかしい」という考え方から、「追分会館」は通り側に「切り妻」を見せるようなシルエットの屋根型が採用されました。



パネリスト 濱田暁生
(シー・アイ・エス計画
研究所代表取締役)

当時の江差のまち並みは、古いものと新しいものが混在してかなりひどい状態でした。道道の拡幅整備の話が持ち上がり、拡幅と歴史的建物の解体・建替えて「江差らしい良さ」が失われる、という議論の中で、「歴史を生かす町並みづくりモデル事業」がスタートしました。当時の“名文句”：「理想と心中するわけにはいかない！」から、妥協して拡幅はするが、本物を残す、地域らしく暮らし続けられる状況を整える、それを実現するために条例と地区計画でしっかり創っていく、「道路拡幅と建物更新だけではなく、地域の魅力アップをめざして、トータルで戦略的にやろう」というのが“テーマ”でした。

歴史的建物の保全に関しても、余計なものが付加された“テンプレ建築”の再生の例や、国の重要文化財の隣の酒屋さんが、由緒ある看板を残して和風喫茶に改修した例もあります。江差は和風だけでなく、洋風や和洋折衷の建物もあって、時代の重なりが面白いまちで、住宅もまち並み形成に協力しています。公共建築の試みでは、昔の役場に関して「壊そう～駐車場にしよう」からスタートして、町民みんなでワークショップを繰り返し、新たな機能を与えながら残すことになりました。隣接した旧郡役所と旧役場、さらに旧中村家の重なりが見えます。このように幾つかの建物が群となって界隈を形成することも大事です。

江差は長い年月をかけ、町に残された歴史的な資産を活かしてまちづくりが続けられました。その過程では、失ったものもありますが、それを経

験し、それに学びながら、今日があると思います。

不思議な魅力の放物線

次にアルテピアッツァ美唄です。典型的な木造の廃校に幾つかの制度を導入して、現代彫刻を核にした芸術文化交流施設として再生されました。

体育館と校舎の一部が残っていましたが、グラウンドは藪状態で、周囲に公営住宅、工場、火葬場などがありました。今では、それらは整理されて、駐車場が整備され、元の学校敷地から後ろの山まで、安田侃さんの彫刻作品が置かれています。

体育館には不思議な魅力の放物線の格子天井がありました。ある意味ではその存在が再生・活用のきっかけになったともいえます。

この取り組みの特徴は、永年にわたって現役の彫刻家がみずからかわり、妥協せず、絶対にこれでなければということをしかりと公共が受け止めてやり続けたことです。周りの自然環境も生かし、過度に手を加えずに残すところはきちんと残すという手法です。例えば、教室の壁には、当時の名札が残っていて、たまに「あっ、私の！」と言う人がいたりします。さっきの増毛の手を入れすぎない雰囲気とも共通しています。

「場の力」と「仕組む」

高橋 私はフィンランドのヘルシンキから南西に80~90km行った小さな村「フィスカルス」を紹介します。

フィスカルスは昔、まず水力がある、それから木炭にするための豊かな森がある、製鉄の村でした。製鉄所ができたのが1649年。1822年に経営者が代わり、製鉄から製造業に変わって機械のメーカーになりました。フィンランドでは最初の製鉄所であり、最初の機械工場であり、先端的な歴史を持った村です。今は、織物、木工、セラミック、金工、アートクラフトなど、この村に住んでいるクリエイティブな人たちによって、まちが再生したということです。

このまちは、まず森がきれいです。私は家具をつくっている関係でストリートファニーチェアが目に入りますが、面白い仕掛けが随所にあります。雪が解けて、明るくなって、北欧の一番いい時期は外が気持ちよく、アートワークが随所にありま

す。川沿いには大きな古い建物のレストランがあります。その裏側は銅鍛冶小屋を利用したクラフトマン、アーティストの展示会場になり、年1回のクラフトアートの大展示会の会場にもなります。建物がまたすごく面白い。大きな銅鍛冶小屋の跡ですから天井も高く、それをうまく使っています。この他に、古い建物をうまく利用した美術館やホテルもあり、フィスカルスの歴史的な遺産などを展示する博物館もあり、はさみなどの製品や、製鉄所の昔の風景が出ています。

うまくいった要因は幾つありますが、一つは「場の持っている力」だと思います。19世紀前半には、経営者が建てた時計塔を持った学校やいろんな建物が建設されました。その設計にかかわったのが、ヘルシンキの都市計画を担ったといわれるエンゲルという建築家で、あるレベル以上の「場の持った力」の中に、いい建築が残りました。残す価値があるものが残り、それに住む人がどうかかわっているかがあったと思います。また、この村全体をフィスカルス1社が所有しており、一元管理で計画をつくりやすかったので、1998年に管理を始めた担当者が、アート、クラフトでもう一度再生しようと呼びかけをして、いろんなプロジェクトを始めた。ですから、物があって、ちゃんとそれを「仕組む」というか、どういうことをするためにどういう仕組みをつくるかという、いろんなことを整理しながら、地道にディスカッションして仕組みをつくっていくということが、この場合でもすごくあったような気がします。

この村は、日本でも話題になっていますし、ヨーロッパでもアートの協同組合によってまちが再生したということで、いろんな話題、問題提起をしていると思います。

歴史的な資産は公共の財産

角 プライベートな資産であっても、まちの中に建った瞬間からある種公共性を帯びてくるし、歴史的な資産も公共の財産の一つということになってくるのですが、その辺を平尾さんから投げかけていただけますか。

平尾 増毛の場合、歴史的な建物はそれほどたくさんあるわけでもないけれど、割と現役だし、國稀酒造さんのように町の中心産業的な位置づけになると、オーナー自身も代々「まち」という意識を強く持っておられます。今後、どうやっていく



パネリスト 高橋三太郎
(家具工房santaro代表)

べきかということは非常に地元も悩んでいますので、民間の建物でも、それが公共的なものであるという意識を持って来ているのです。この先、それをみんなでどうやって守っていくか、使っていくかということが大切なのだらうと思います。

高橋 難しいですね、パブリックという意識も。日本人は、みんなが使っているもの、パブリックなものは、自分のものではないのです。本来は自分のものでもあるはずですが、やっぱり他人のものなのです。私は毎年、雪解け後に近くのトンネルの掃除をするのですが、トラック3台ぐらいのごみを拾うのです。あれは「自分の住んでいる場所ではない」というか、パブリックという意識を持っていないのではないかと思うのです。

濱田 江差で民間の建物をまち並み協定で縛るといふ時に、「何で俺のものをみんなからうるさく言われるのだ」という議論があり、個人の財産でも、少なくとも外から見えるところはパブリックの意味を持つことから、そこに対してはルールをつくろうということにしたのです。このパブリックの考えは、物の形だけではなくて、維持管理、草刈り、花壇の整理、ごみ処理などを含めての考え方として出てこなければならぬ話かとは思っています。



角 最後に、今日のテーマである「個性あるまちづくり」についての方向性、課題、考えるべき点などをお一人ずつ言っていただこうかと思えます。なかなか難しいものだと思うのですが。

自分の暮らしを美しく

高橋 難しい質問なのですが、私は「まず自分」だと思うのです。スウェーデンでは自分の暮らしを美しくという運動がずっと地道にあって、それで貧しかったスウェーデンが、すごく質素であるけれど、豊かな暮らしをしていると思うのです。ですから、まず自分の暮らしをどうしようかとい

うのがベースにあって始まっていく。行く方向は同じでも、ものづくりとしてのアプローチは、まず自分たちの暮らしを美しく、それには道具をつくるか、見せるとかということから始まっていくと思っています。

コミュニティのルール

平尾 先ほどの江差で全員の合意によって実現できた部分というのはすごいなと思ったのですが、全体主義的ではなく、あくまで民主的なルールの中での全員の合意、100パーセントは難しいにしても、大多数の意見によってひとつのルールをつくる。それをまずコミュニティがつくっていく。そういうのをやると、コミュニティごとにいろいろなやり方ができてくるのではないかという気がします。

心のゆとりを見直す場を

濱田 時間や心のゆとりも含めて、暮らしにゆとりがないと美しさや快適性をしっかりと考えられない。自分たちの暮らしを大事にしていくためにコミュニティがどうあってほしいというかわり方が本来ではないかという気がします。アルテピアッツァは私にとっては心のゆとりを見直す場なのですが、このような場合は、住んでいる札幌の暮らしの中にもあるべきで、そのところを、市民それぞれが考えていく中で、共通なところで手を取り合えばコミュニティの取り組みとして十分に意義があるのではないかと考えています。

自分自身の身の回りから公共へ

角 「結局は、当たり前のこと」という言い方は大変失礼なのですが、自分の暮らし、もしくは自分自身の身の回り、もしくは自分が立っている立ち位置、そこをちゃんとすることから始まるという、それが一つの大きなキーワードとして出てきたと思います。今日は、公共とは何なのかということを考えるいい機会になりましたし、公共をみんなが意識することで、地域が、コミュニティが、さらにはまちが良くなっていくのではないかという、お話ではなかったかと感じました。

◆詳細は、以下の開発局営繕部HPをご覧ください。

http://www.hkd.mlit.go.jp/zygyoka/z_eizen/frame.htm